様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ９ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２４０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2024
課題番号：１９Ｋ０２６１９

研究課題名（和文）医療型重症心身障害児入所施設における保育士の職務継続支援や教育プログラムの検討

研究課題名（英文）Consideration of vocational continuity support and educational programs for childcare workers in medical facilities for severely physically handicapped children.

研究代表者

川合　美奈（KAWAI, MINA）

埼玉医科大学・保健医療学部・講師

研究者番号：１０５１５９１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，これまで調査がされていなかった医療型重症心身障害児入所施設の保育士を対象として，その実態を明らかにした。保育士は，障害をもつ子どもを対象とすることや医療的な知識のない中で医療依存度の高い子どもの療育をすること，少数職種であるための困難さがあるのであろうと漠然と考えていた。研究を通じて明らかにした医療系施設保育士の実態は，当初の仮定と一致することも多かったが，保育所とは異なる状況下に置かれる覚悟やそれを受容する時間，新たな専門性に向かう葛藤という問題は新たな知見であった。今回の実態調査を踏まえて提示した教育プログラムが実際に運用することができるように，研究の継続が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
我が国の高い新生児救命率に伴い、重症心身障害をもつ子どもが増えている。在宅や施設で生活を送るこれらの子ども達がより質の高い生活を送れるよう、医療職のみならず、子どもの発達や生活を重視した保育職の関わりが重要である。しかし、保育士への教育体制は整っていない。今回の研究で提示した教育プログラムを実際に運用できるようにすることで、医療型重症心身障害児入所施設で勤務する保育士の労働環境の整備に繋げることができる。また、質の高い保育の提供は子どもたちの生活の質の向上に寄与するものと考える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify the realities of nursery teachers working in medical-type residential facilities for children with severe physical and intellectual disabilities, a field that had not been previously investigated. It was initially assumed that these nursery teachers faced challenges due to working with children with disabilities, providing therapeutic support to highly medically dependent children without prior medical knowledge, and being in a profession with a small workforce.
Through this research, many findings aligned with our initial assumptions. However, new insights emerged, including the necessity for mental preparedness in environments different from regular nurseries, the time required to accept their roles, and the internal struggles involved in developing new expertise.
To facilitate the practical implementation of the educational program proposed based on this study, continued research is necessary.

研究分野：子ども学

キーワード：医療の場における保育士　教育プログラム　医療型重症心身障害児入所施設

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 医療型重症心身障害児入所施設における保育職の役割

2012 年に児童福祉法が一部改正され、重症心身障害児施設は医療型障害児入所施設と名称が変わった。障害児施設が一元化されたが、医療ケアが必要な重症心身障害児の受け入れは他の障害児施設では難しい。医療型重症心身障害児施設は、施設に入所又は指定医療機関に入院している障害児に対して、保護、日常生活の指導及び知識技能の付与並びに治療を行うことを目的としている。人員基準をみると、主として重症心身障害児を入所させる場合には、病院として必要とされる従業者以外に、児童指導員及び保育士が各 1 名以上、児童発達支援管理責任者 1 名以上、理学療法士又は作業療法士 1 名以上、心理指導を担当する職員 1 名以上の配置が定められている。重症心身障害児にとってより良い療育環境を作るためには、一定数の保育士を含む人材が確保でき、かつ継続して療育の質が保てるように幅広い年代、経験をもつスタッフ構成であることが望ましい。

保育士とは「保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう」（児童福祉法第 18 条の 4）とされる。さらに保育とは「乳幼児を保護し育てること。乳幼児の心身の正常な発達のために行われる養護を含んだ教育作用」とされる。そして療育とは「障害児が医療的配慮のもとで育成されること」とされる。つまり、医療型重症心身障害児入所施設での保育士の役割は、「障害児に対して、医療的配慮のもと、発達を支援するために養護を含んだ教育的な働き掛けを行うことである」と考える。

(2) 医療型重症心身障害児入所施設の保育士としての就業

2014 年 4 月 28 日に公表された東京都福祉保健局の“ 東京都保育士実態調査報告書 ”によると、回答者の 53.4%が保育士として就業中であり、保育士以外の職種で就業中のものは 27%であった。2018 年 4 月 1 日現在で 8 施設ある A 県内の医療型重症心身障害児入所施設の一つでは、療育士が勤務し医療職と協働している。療育士と呼ばれるスタッフには、保育士、介護士が含まれ、主に障害児の発達を支援する療育活動の他、日常生活を支える業務、看護補助業務を行っている。多職種と協働する環境や保育所とは違った業務内容に戸惑うことや、医療度の高さから既習の学習内容と一致しないことも多く、再学習が必要となる。それならば既習の知識を最大限に活用できる場で働きたいという気持ちが湧き上がり、離職に繋がることも不思議ではない。教育背景の異なる多職種との協働には認識の相違も生じることが予測される。また、少数であるが故に卒後教育プログラムが確立されておらず、教育といっても業務指導を行うことが主となっている可能性が高い。更には、キャリアイメージを描き難いことから医療型重症心身障害児入所施設での職務継続への影響も懸念される。安定した人材確保や人材育成が困難であることは、重症心身障害児にとってのより良い療育環境作りの弊害となると考えた。

２．研究の目的

医療型重症心身障害児入所施設で勤務する保育士の仕事内容、やり甲斐、困難感、教育ニーズを知り、職務継続支援の方法や教育プログラムの内容を検討することを目的とした。この研究により、重症心身障害児にとってより良い療育環境作りに繋げたいと考えた。

３．研究の方法

研究目的を明らかにするために、まずは医療型障害児入所施設のうち、重症心身障害児を対象とし入所体系を取っている施設に勤務する保育士に対して、インタビュー調査を行い、保育士が行っている業務および業務に対する感情を帰納的分析により明らかにした【研究 1】。次に、【研究 1】の結果を参考に質問項目を構成し、全国の医療型障害児入所施設の保育士を対象とした質問紙法による量的調査と統計的分析により、保育士の業務内容、業務に対する感情の特徴を明らかにし、かつ経験年数の違いによる差異があると仮定し、分析を行った【研究 2】。最後に【研究 2】の結果を、実際の現場の状況や保育士はどのように感じるか、保育の対象となる学童期以下の子どもの病床比率が高い医療型重症心身障害児入所施設の保育士に対するグループインタビューにより確認した【研究 3】。さらに、参考にできる教育システムを比較検討し、教育プログラムの基盤とした後、【研究 1～3】の結果、専門性に関する文献検討等を参考に、専門性向上を目指した医療系施設保育士のための教育プログラムを検討、その方向性を提案した。

４．研究成果

当初の計画を修正し、医療系施設保育士の実態を 3 つの調査から段階的に明らかにした。研究 1 では、医療型重症心身障害児入所施設の保育士を対象として、保育士が認識する業務内容、仕事に関連する感情の認識を明らかにするため、3 施設 12 人の保育士に対して、インタビュー調

査を行った。対象者選定の条件は、重症心身障害児入所施設において、保育活動を必要とする学童期以下の医療的ケアが必要な障害児と日々接することができる者とした。調査対象のうち、重症心身障害児入所施設のみの保育士経験群の 6 人は、経験年数 2〜34 年であった。重症心身障害児入所施設以外の保育士経験群は 6 人で、保育士経験年数は 4〜30 年に対し、重症心身障害児入所施設の勤務経験年数は 2〜7 年であった。結果は、次のとおりである。保育士が認識する業務内容には【看護業務の補助】が含まれていた。そして、保育士の専門性を最大限発揮できる【子どもとの直接的な関わり】が楽しさ・やりがいの特徴であった。保育士経験の有無でみると、重症心身障害児入所施設のみの勤務経験群は、大変さ・困難さでは【自身の経験や能力の不足】が最も多く、【保育士業務を遂行する上での気持ちの葛藤】、【保育士の役割への理解不足】について語られたコードが多かった。この研究 1 の結果を参考に研究 2 の質問紙を作成し、量的調査により医療系施設保育士の実態をさらに探求した。

研究 2 では、医療系施設保育士の業務内容、業務に関連する感情等の実態を明らかにするために、全国の医療型障害児入所施設で勤務する保育士 71 施設 430 人に対して質問紙調査を実施し、247 人から回答を得た（回収率 57.4%）。238 人分の有効回答は勤務経験年数により 3 群（3 年目以下 83 人、7 年目以下 62 人、8 年目以上 93 人）に分け、比較した。結果は次のとおりである。療育活動・発達支援、直接的な生活支援、間接的な生活支援、行事やイベントの企画・運営はいずれの群も業務であるという認識が高かった。子どもと関わり、子どもの反応や変化を見極め、新たな方法の創意工夫に努める行動は楽しさであり、やりがいであった。いずれも経験年数での認識の差はみられなかった。そして、医療系施設特有の内容である「医療知識の不足」、「人員不足による不全感」を大変であると感じていた。また、経験年数での差を認めたものは「自分がしたい業務イメージと現実の不一致」、「重心保育士としての経験の浅さに伴う自信のなさ」、「自分自身への不能感や自信のなさ」、「保育職への理解の不足」であった。「子どもへの対応の知識や技術の不足に対する施設内研修」、「自分自身の医療知識の不足を補うための個別の施設内研修」、「人員不足に関係する問題の検討」は、所属施設で実施されると働きやすくなると回答した者が多く、改善が期待されている項目であった。また、我が子の障害を受容できない家族の対応を含み難易度の高い「家族への対応に関する施設内研修」の実施希望についても経験年数により差を認めた。「医療的な知識の向上に関すること」、「遊びや玩具、教材の工夫などに関すること」、「障害に合わせた関わりの工夫」、「他の医療型障害児入所施設の保育士の活動」、「音楽療法やスヌーズレンに関すること」については、6 割以上が今後勉強したいと回答していた。この研究 2 は、全国の医療型障害児入所施設に勤務する保育士を対象としているが、施設によっては成人・高齢者を含んでおり、子どものみを対象として働く保育士の調査の結果ではない。そのため、この量的調査の結果が、教育プログラムの対象となる医療型重症心身障害児入所施設に勤務する保育士の実態においても相違ないかを、研究 3 にて確認した。

研究 3 は、医療型重症心身障害児入所施設に勤務する保育士に限定したグループインタビューを実施した。結果は次のとおりである。医療系施設保育士の業務内容の認識は、研究 2 の質問紙調査の結果と一致していたが、看護補助は範疇外の業務であるという認識がより明確になった。また、業務内容のインタビュー時間に看護職や、看護職との協働にまつわる話題が多く、保育士にとって接点の多い職種は看護職であることが再確認できた。業務内容のうち「子どもの生活支援」は研究 2 からは保育士の業務であるが、研究 3 では共同作業であると認識していた。子どものためにと考え、自身の業務ではないと葛藤を抱えつつも看護補助を行う保育士にとって、[保育士が可能な範囲の明確化]をすることは重要である。そして、ポジティブな感情である楽しさ・やりがいについて、喜びの感情が単純に楽しさに繋がるわけではないことが明らかになった。研究 2 と比較をすると、保育士にとっては、[子どもとの関わりが重要]であるということ、[子ども達の成長や家族との絆を感じることが魅力]であることが一致した。これは、保育士の専門性を最も発揮できる場面であり、どのような施設で働く場合でも子どもと関わる時間を十分に確保すべきである。さらに、ネガティブな感情である大変さ・困難さについて、研究 2 の結果と比較をすると、【医療知識の不足】については、研究 3 では [予備知識の不足による困難感]、[医療知識の理解が追い付かない]と同様に感じていた。研究 2 において困難感の大きかった【人員不足によってしたいことができないこと】については、研究 3 でも[人員と業務の不均衡]があるため、[保育士資格を活かしきれない可能性の覚悟]が必要であることが示された。追学習や職種の専門性に合わせた役割分担が必要である。医療型重症心身障害児入所施設の保育士として勤務する状況の受容には時間が必要で、その間にも理想と現実の不一致は継続し、自己の目標達成には困難感がある。医療系施設で働くと決めた時点で保育士資格を活かしきれない可能性の覚悟が必要である。他職種の保育士の専門性に対する理解不足によって、保育士としての存在意義のゆらぎを感じる。加えて、保育職間でも保育観の相違があり、療育活動の振り返りの必要性を感じている。これらのことが明らかになった。これからの学びでは、介護的な動作や、子どもとの交流方法の多様さの学びの希望があった。また、保育士としてどうあるべきかを他施設の様子を参考に検討したいことが語られた。改善の希望では、保育士としての専門性を活かせない環境、医療職が優先された役割分担、立場意識等に関して改善の希望が寄せられた。さらに、研修方法による理解度の相違があることが明らかになった。

保育士が認識する業務を大きく区分すると、中心的業務、協働業務、範疇外業務の 3 種であった。この 3 種の業務をどのような比率で担えるかが、専門性発揮の分かれ目になり、保育士の業務に関する感情に影響する。そして、楽しさ・やりがい等のポジティブな感情は、新たな役割や

学びの意欲に繋がり、大変さ・困難さ等のネガティブな感情は、改善への期待に繋がる。このように医療系施設保育士の働き方には、“ 業務認識 ”、“ ポジティブな感情 ”、“ ネガティブな感情 ”、“ これからの学び、改善の希望 ” の 4 つの要素が相互的に関係している。相乗効果とできるかは、教育プログラム、組織の中での役割分担を含む保育士の働く環境の整備に左右されると考える。そのため、教育プログラムの運用に向けては、別の角度からの追加研究が必要であると考えられた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 川合美奈　内田千春	４．巻 61
２．論文標題 医療型重症心身障害児入所施設の保育士が認識する業務内容と関連する感情―楽しさ・やりがい，大変さ・困難さに着目して―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 保育学研究	６．最初と最後の頁 55-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20617/reccej.61.2_55	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 川合美奈	４．巻 62
２．論文標題 医療型重症心身障害児入所施設の保育士の専門性に関する文献検討 -医療保育士、保育所保育士の専門性と比較して-	５．発行年 2024年
３．雑誌名 保育学研究	６．最初と最後の頁 79-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20617/reccej.62.1_79	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 川合美奈、内田千春
２．発表標題 医療型障害児入所施設と医療保育士の専門性に関する文献検討-保育所保育士の専門性と比較して-
３．学会等名 第70回日本小児保健協会学術集会
４．発表年 2023年

１．発表者名 川合美奈、内田千春
２．発表標題 医療型重症心身障害児入所施設で勤務する保育士が認識する業務内容、遣り甲斐、困難感の特徴
３．学会等名 日本保育学会第75回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 川合美奈
２．発表標題 医療型障害児入所施設における保育士が認識する困難感
３．学会等名 日本医療保育学会第24回学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 川合美奈
２．発表標題 医療型障害児入所施設における保育士の勤務経験年数による業務認識の差異
３．学会等名 第72回日本小児保健協会学術集会
４．発表年 2025年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	木浪　智佳子 (KINAMI CHIKAKO) (40347183)	北海道医療大学・看護福祉学部・教授 (30110)	
研究分担者	三國　久美 (MIKUNI KUMI) (50265097)	北海道医療大学・看護福祉学部・教授 (30110)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関